



目次

0. モンゴルの概要
1. 出会ったモンゴルの人たち
2. 調査概要
 - ・ Vulture
 - ・ Small mammals
 - ・ Plants
3. プロジェクトの体験から学んだこと
 - ・ 本当の自然との出会いについて
 - ・ 自然を愛する心を育むには
 - ・ 命をいただくということ
 - ・ コミュニケーション、異文化理解の重要性
 - ・ 暮らしの工夫～エコライフ～
 - ・ 人間性
4. アースウォッチでの体験が学校教育にどのような意味を持つか
 - ・ 校内若手研修での情報共有
 - ・ 外国語活動
 - ・ 理科教育
 - ・ 人権教育
 - ・ 同和教育
5. 終わりに「自分自身が体験することの意義」

0. モンゴルの概要

首都 ウランバートル

公用語 モンゴル語

人口 約300万人 ウランバートルに住むのが140万人

通貨 Tg (トゥグルグ) または MNT

物価 日本の4分の1くらい

宗教 チベット仏教 西部はイスラム教



ウランバートルの町の様子



ビルが立ち並ぶ



交通渋滞 トヨタ車が多い



ウランバートルから車で移動すると…



ゲルで生活



囲いの中にゲル



草原の中に町が点在



たくさんの家畜

家畜の種類は5種類



ヤギと羊 (一緒に飼う)



馬



牛



ラクダ

1. 参加メンバー

出会ったモンゴルの人たち

Gana Wingard (ガナ) プログラムのディレクター Denver Zoo
の職員 英語・ロシア語・モンゴル語が話せる

Remo (リモ) small mammal のモンゴルの研究者

Serchee (サーチャー) vulture のモンゴルの研究者

Tuvshee (トフシェー) plants のモンゴルの研究者 IKH NART
の職員

Bolor(ボラ)plants を研究しているモンゴルの大学生

Tseegii(ティギー)コックさん noodle やパンも手作り

Ariunaa (アルナ) 掃除や食器洗いなどいろいろなことをしてくれる

Ulzii(ウージー)camp manager 草を刈ったりガソリンを買いに行ったりしてくれる

Jagaa (ジャガー) ドライバー

Baagii (バギー) ドライバー

Puugii(プギー)ドライバー

出会った Earth Watch ボランティアの人たち

(全員アメリカ合衆国出身)

Gail Underbakke (ゲイル)

Delon Underbakke (デイル)

Diana Brookshire (ダイアナ)

M. J.Pramik (エムジェー)

Karen Baker (カレン)



2. 調査概要

IKH NART 自然保護区内の野生生物の生態を調査し、相互にどう影響しあっているかを調べる。

調査①Vulture

まさに感動するほどの大きな巣。たくさんの木の枝を集め、岩の高いところや木の上に
作られた日本ではまず見たことのない巣。そんな中に入っているのはクロハゲワシ
(Cinereous Vulture) の生後 100~120 日ほどのまだ飛べない Chick (ヒナ) だ。Vulture

は生後 120 日ごろまで、つまり飛べるようになるまでは親に育
ててもら。Vulture の親は動物の死肉を食べ、胃に取り込んで
置き、それをヒナに与えて子育てするという。飛べるようにな
ると冬になってしまうまでに south Korea に行って卵が産める 5
歳になるまでそこで暮らす。そしてまた 5 歳になるとモンゴルに帰ってきて子育てをして暮らす。巣は
もともとあるものを使うことが多いが、年に 20 くらいは新しい巣をつくるものもいるらしい。

Vulture を研究している
Serchee は 470 個ほどある巣の場

所を全て覚えており、そのうちどの巣に Chick がいるかを春
の調査で把握している。高い岩の上も、木の上も全て彼が 1
人で登り、Vulture の目を隠し、捕まえる。たまに 500m ほど
先まで飛び降りる Chick も走って追いかけて、捕まえてしまう。

中には死んでしまっていたり、怪我をしてしまっていたりした Chick もいるし、すでに飛び立った後の巣もある。その生態状況を



正確に確認し、サイズを測ったりタグをつけたりする。

ボランティアの作業はその記録をしたり、Vulture が飛び立たないように抑えたりするのを手伝った。Serchee が必要な時に必要なメジャーやタグバンド、温度計などをさっと差し出す役目も重要だ。Chick には測定中はストレスをかけてしまうことになるので、できるだけスムーズに行うことが重要だと感じた。もちろんそのあとはもとの巣に Serchee がまた Chick を抱きかかえて戻した。



Gana は Vulture がこうして人から保護された状態で安心して巣作りができる環境をとっても大切にしているため、保護区の広さを少し広げたりもしたとも言っていた。モンゴルは昔から遊牧民が多くの家畜を飼い、その死体が転がっていることもある。その死体を食べる（きれいに掃除する）のが Vulture の役目。キャンプ中、何匹か Vulture が集まっている様子も見られた。Vulture はそういう形でモンゴルの大切な生態系を担う存在なのだと感じた。

調査②small mammals

モンゴルの大草原にはたくさんの野生の哺乳類がいる。日本ではハムスターやハリネズミなどはペットショップでしか見たことがない。夕方 6 時くらいに 100×2 か所のトラップを仕掛ける。夜に行動する種類が多いからだ。中には「クスクス」という餌になるものを入れておく。すると朝には毎日 10 匹～20 匹くらいの hamster や jeboa, gerbil がトラップの中に入っている。いくつか環境の違う場所でどんな種類の small mammal がどれくらいの量取れるのか比較しているようだった。



Hamster は背中にあるラインで見分ける、gerbil は爪の色、jeboa はしっぽの色と歯の色で見分けるなど、Remo はもうすでに図鑑を見なくても種類分けすることができる。また、どうやって見分けるのかたくさん教えてくれた。

ボランティアの作業は Vulture のときと同じく、記録したり重さを量ったりする役目だ。日数を重ねるごとに作業も早くなっていくが記録にミスがあってはならない。記録している人が間違っ

ていないかを確認する役目の人もいた。もちろん毎日 200 個のトラップを夕方仕掛けて早朝に開く作業自体は難しくないが少人数だととにかく時間がかかる。しかしボランティアやドライバーも協力すればすぐに終わる。そして午前と午後にまた有意義な時間を作り出せる。チームを作って協力して研究に取り組むことの良さがよくわかった。

調査③Plants

モンゴルの 8 月はお花畑である。初めはほとんど同じ種類の草が生え、「草原」となっているのだと思っていた。写真で見るモン



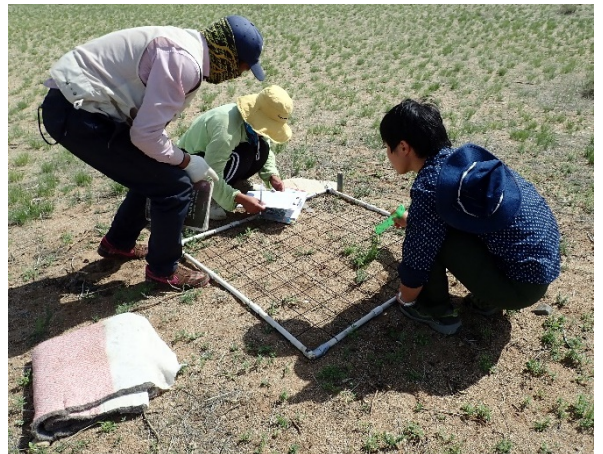
ゴルの草原はほとんど同じ色の緑色に見えたからだ。しかしながらモンゴルの地を歩く過程の中で感動するほど多くの種類の花が咲いていた。選びきれないが数種類の写真を載せたいと思う。



Plants を研究している Tuvshee によると、モンゴルでは6・7月はほとんど雨が降らず、植物たちは十分に育てない。なので比較的雨が良く降りあたたかい8月に一気に花を咲かせて9月にはもう種をつくってしまわないといけないそうだ。今までの植物研究の積み重ねがあり、IKH NART の植物図鑑が完成していた。現地で Gana に植物の名前を聞くと「図鑑があるから購入する？」と聞いてくれたのですぐその場で購入することができた。

その図鑑には216種類の植物が載っていた。さらにはIKH NART のどのあたりに分布しているか、そしてどの時期に花を咲かせるのかなど細かく記してあった。しかし、中にはその図鑑には載っていないものも結構あり、Tuvshee が個人的に所持していた別の図鑑で種類を調べることもあった。

Tuvshee の調査する場所では5か所の plot で植生調査をする。もちろん調査する場所もきちんと GPS で記録した正確な場所を選んでいる。ボランティアの作業は1m×1mの四方のなかに何の種類の植物が何本生えているのかを数える。そしてその中から最大、最小、中間それぞれの植物のサイズを測って記録をする。また、1m×1mの中の植物をすべて根のみ残して茎のできるだけ根元のほうから1本残らず切り取り、重さを量る。私は植物の名前を憶えて数える作業が時間はかかるが楽しかった。(1番多い時には1m×1mの中に1つの種類だけで500本あり、そのときはさすがに大変だったが…)



日を重ねるごと

に同じように見えていた植物の「個性」を見られるようになっていった。Tuvshee にはそれがもうわかっていて、確かによくよく見ると少しずつ違うのだ。見分けにくいものを見分けられる、その「個性」を見る目が養われていくのはとても面白かった。そしてその分植物への愛着が増す。やはり自然は図鑑だけでは分らない。実際に見て、触って、匂いを嗅いで Tuvshee に聞くと、図鑑に載っていない特徴がたくさんあると実感した。そもそもモンゴルにこんなに生命力ある植物がたくさんあるなんて思ってもみなかったのだ。小さいけれどしっかりと咲いているその花たちはまるで日本でいう高山植物と似てい



た。岩の隙間からも咲いていたからかもしれない。咲けない時間が多くあるからこそ、長い冬や乾期を乗り越えて咲くからこそこんなにも生命力を感じるのだろうか…と思った。

3. プロジェクトの体験から学んだこと

本物の自然との出会いについて

モンゴルでの自然は、京都で出会う自然とは違った。もちろん、気候が違うとか、生態系が違うとかそういう意味ではなく、本質が違う。京都では人々の暮らしの中に、御所や植物園、公園があり、そこにたくさんの自然がある。山にも登るべき道がある。自然がなくても生きていける。

対して人口密度が世界で一番低いモンゴルでは、ウランバートル以外は「自然の中に人々の暮らし」があった。人々はモンゴルの土地の形も植物も変えることなく、そのありのままの場所でゲルを築き、暮らす。小さな町もいくつかあるが一步外に出れば広大な自然が広がる。モンゴルには自然を歌にしたものも多い。道は作ったものもあるが、それ以外は車が通った後が「轍」となっていた。

モンゴルではいつも当たり前のようにある空の青、雲の白ってこんなに美しかったのだと気づくことができた。(気づけば空の写真をいっぱい取っていた自分がいた) また、夜トイレに行こうと夜中目を覚ますと、星がありすぎて、美しすぎてなかなか動くことができない。どれが夏の大三角なのか、北斗七星なのか分りにくい。なのに天の川はくっきり見えた。この星空を忘れたくないのに写真では絶対に写せない。ふとした出来事が、心に残る感動の一つになった。



日本でも沖永良部島というところに行ったときに雄大な自然を感じたことがある。遊べる場所はきれいな海以外何もない。映画館もない。でもいろんな海で毎日遊んだこと、100m先まで見通せる海のきれいさが心に残っている。夜には星の数や近さが都会とは違う。島の言葉と三線や太鼓で、島の自然を愛する歌をたくさん歌う。また、6年生では日本の歴史を学ぶ中で北海道のアイヌ民族のことを学習する。彼らも「自然の中で生きる」という生き方をしてきた。明治以降の同化政策で政府はその生活を無理やり奪った。それは、自然を愛する心、伝統を奪うことであり、それを取り戻すことはとても難しい。

思えば、本物の自然は「人々の暮らしの中でどれだけありのままの自然を大切にしてきたか」ということなのかもしれない。自然と近い暮らしを大切にしている人々が現地にいてこそ、本当の自然だと思う。日本でも愛され、大切にされてきた自然がきっと知らないだけでまだまだある。そんな自然を見つけていきたい。

自然を愛する心を育むには

本物の自然がなければ、自然を愛する心は育てられないのかという疑問ができた。モンゴルでは自然がすぐそばにあるからこそ、(逆に現地の人にとって星空の美しさなど当たり前すぎてむしろ感動はないものもあるが)「自然あるモンゴル」を人々は国として愛していると感じる。

なぜなら、私たちにいっぱい伝えようとしてくれたからだ。

てみたいな～」とか図鑑を見ながらそんな話をしていた。キャンプ最終日、その話を憶えていてくれた Tuvshee がその花を見つけて指さしてくれた喜びと感動が忘れられない。それが右の写真の花で私がモンゴルで一番好きな花だ。

そして Tuvshee は植物の葉の量と比べて根の多さ、太さを伝えてくれようとわざわざ植物を掘って見せてくれ、一生懸命、英語の辞書を開きながら伝えようとしてくれた。少ない雨でも力強く生きられる工夫がそこにあったのだ。掘ってくれなければ絶対に気づけなかっただろう。

また、乾燥しているモンゴルではものすごく珍しいのだと思われる、コケの一種を岩の隙間を一生懸命のぞきながら、嬉しそうに見せてくれた時も日本でも普通にあるはずのただのコケなのに、感動した。



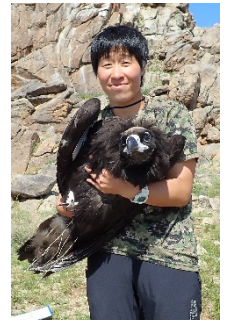
植物が好きな私は「この花み



Tuvshee だけではない。Remo や Jagaa, Baagii はアルガリやアイベックスというモンゴルで大切に保護しているヤギの一種を見つけた時、必ず止まって、教えてくれようとする。ある時、アルガリを集団で見つけた時、ズーム機能をあまり兼ね備えていないカメラしか持ち合わせてなかった私に「スマホかして」と言い、スマホと望遠鏡を駆使して 20 分以上かけて写真を撮ってくれた。ふつうはゴマ粒くらいの大きさしか見えないのに、姿かたちが分かるくらい大きくアルガリが写っている写真も、Remo と Jagaa が協力して取ってくれているその姿も嬉しくてたまらない、宝物になった。



Serchee はまだ若くて動くことができないヒナがいた時「Wakana san, Comon!」と言って触っていいよというジェスチャーをしてくれた。写真撮るからストップ! という仕草で写真を撮ってくれた。大きくなったヒナも、「持ってみていいよ」と持たせてくれた。大変そうな Serchee に「持たせてくれ」なんてこちらから頼むなんてできない。お願いしていないのに、そういう心遣いのおかげで体験できたこと



とがたくさんある。持つのに足の持ち方に工夫がある。持ってみて初めてその難しさや Vulture への気遣いも分かる。そして Vulture の体温はとても高い。大切な命を抱くことで、より一層、大切にしたいという思いは強まった。

私がモンゴルの自然に感動できたこと、モンゴルの自然を大好きになったのは全て、モンゴルの自然を愛する人たちと出会えたからだ。

教科書をどのように教えるのかだけを考えていてはそんな人に出会うことは難しい。外に出ようとしなからだ。授業を通してもちろんビデオで映像を見せたり、深く考えたりできる工夫を凝らすことは重要だが、本物の自然での感動は自然に出会いに行くことをしなければ出会えない。もちろんモンゴルでもきっとすべての人が自然を愛しているわけではないのも分かっているが。

ということは逆に言うと、「自然」には「出会うだけで感動」という魅力があると感じる。「なんだこれ! 面白い!」「きれい!」「いい匂い!」…などといった「出会うだけで感動」という魅力を知っているだけで、出会いたくなる。出会いに行きたくなる。でもそのためには自然との出合いをつないでくれる人が必要なかもしれない。もちろん初めから出会うだけで感動する子もいるが、ただ咲いている花の魅力や面白さを知らない子もいるし、ただ落ちている石がどうやってできてどういふところから来たのか、その奥深さに目を向けることはかなり難しい。むしろ親によっては、子どもが何か面白いものを見つけても「汚いから触りません」と教えているところもあるだろう。子どもたちに自然を愛する心を教えるには、まずは教師の心を育て

ていく必要性があると思う。京都の植物同好会、キノコ観察会など様々な機会があるが、若年層は少ない。私自身、まだまだ自然のことをほとんど知らない。でも感動は知っている。そして全然知らないということを知ると、だから自然は奥が深くて面白いと感じる。やはり、教科書を上手に教えて、子どもたちが楽しそうに実験しているとそれだけで満足したりしてしまうのではダメなのだ。教科書には限界がある。

本物の自然がなければ、本当に自然を愛する心は育てられないわけではない。しかし出会っていても自然の魅力に気づかないという問題があるのでものすごく難しい。まずは教師が「出会うだけで感動！」を感じる事が大切だと思う。やはり、その感動を体験して初めて伝えたいという思いにつながると思うからだ。

命をいただくということ

自然の中で暮らす中で忘れてはいけないことが、「命をいただく」ということである。「いただきます」と毎日給食を食べるときに言っていたのに、その本当の意味を実は見たことがなかったのだ。日本ではスーパーで必要な大きさに切られて売られているお肉。モンゴルでヤギを飼ってきて殺すところから裁くところまで見せてもらった。正直、初めて見る私は「うっ」と顔をそむけたくなったけれど、なんとなく、「絶対にそむけてはいけない」ような気持ちにかられた。まずは頭をトンカチで殴って気絶させ、お腹から手を入れて息の根を素早くとめる。皮をはぎ、内臓を取り出す。内臓もほとんどが食べられる。皮をはぐには力もいるし、内臓を取り出すには知識もいる。



そのありがたみに気づきにくい社会。見たくないものを見ずに、生きていける社会。日本は歴史的に、特に穢れ意識が強く、そういうことを一部の人間にやらせてきた。そして今もその差別されてきた人たちを差別し続けている社会がある。命への感謝、それをさばいてくれている人たちへの感謝、同和教育を大切にしている今勤務している学校で、それを心から感じられたことはとても大きな学びとなった。

コミュニケーション、異文化理解の重要性

異文化を知ることが重要であるが、日本でははっきり言って難しい。教室の中の大半が日本人、どこへ行っても日本語を話している国は珍しい。だからこそ、私自身も外国語を学ぶ必要性をなかなか感じられなかった。しかし、現地では英語かモンゴル語での会話しかなく、モンゴルの人たちが研究結果をプレゼンテーションしてくれても意味が分からない。でも知りたいから、夜、英和辞書を引き、英語を学ぶことが苦ではなかった。また、英語の会話中、意味が分からないとき、笑顔で聞けばいいのか、真顔で聞けばいいのか、そもそもこの場にいていいのか、そんな思いを持ちなが



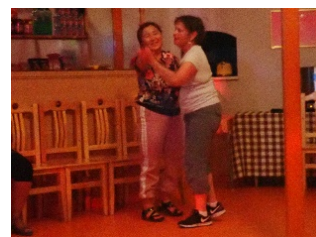
ら相づちも打てない自分が悔しかった。逆に会話ができるときはとにかく嬉しくて楽しい。分かり合えると嬉しいのだ。中学、高校で英語を学んでよかったと初めて思えた。

でも、それよりも大きな学びは、モンゴル語で話す、つまり現地の言葉で話すことの重要性に気づけたことだ。日本では英語を重視しすぎて、外国人を見るととりあえず「ハロー、センキュー」と言う。その人がドイツの方かもしれないのに、外国語＝英語のようなところがあり、それ以外の言語を学ぶことを軽視する傾向にあると感じる。けれど、モンゴルの人と話すと、英語で話すと、モンゴル語で話しかけると、表情や反応の柔らかさが違うと感じた。「モンゴル語でこれなんて言うの？」と聞くとそれ以外のものまで教えてくれた。毎日のあいさつや使う道具は使っているとすぐに話せるようになった。また、逆に「日本語で美味しいってなんていうの？」とか聞いてくれるととても嬉しくて、日本語を大切にしてくれているんだなと感じた。アメリカ出身の人たちに比べて、初めはシャイで少し関わりにくいと感じていたモンゴルの人たちとの距離がものすごく縮まったのは、簡単なあいさつでモンゴル語を使い始めてからだと思う。

モンゴルの人たちが集まってモンゴル語で歌を歌ってくれる機会があり、素敵な時間だった。そこでその歌を一緒に歌いたいと思って録音していた歌を日本語のカタカナに変換して歌ってみたら、ものすごく喜んでくれた。それだけではなく Tseegii や Ariunaa など調査中はあまり関わりのなかった人たちも、「違う違う、ここはこう言うんだよ」と熱心に何度も教えてくれた。同じ歌と一緒にノリノリで歌えたときはものすごく楽しかった。



また、モンゴルでの伝統的な遊びやいろいろなエンターテインメントも教えてくれた。ネットがなくても歌やダンス、日本の漫画などいろいろなそれぞれの国でそれぞれの人生の楽しみ方がある。夜遅くまで疲れているであろう人たちがみんな集まってモンゴルの遊びを一緒にしてくれることが嬉しかった。



きっと、「モンゴル語が少数言語で覚えても役に立たない」なんて考えていたら、絶対に縮まらない距離がある。小学生に外国語を教えるときにはその「すべての外国語に親しむ素地」を大切に育んでいけたらいいと思う。

暮らしの工夫～エコライフ～



食器洗いは3つの桶に水をためて順に洗い流していく。1つ目の桶には洗剤が入っている。貴重な水を使いすぎない工夫。



ゲルの中にあることが多い洗面台。水をタンクの中にためておくと蛇口から水を出せる。チョロチョロとしか水が出ないようになっている。節水の工夫の一つ。



トイレはもちろん水洗ではないが、毎日掃除してくれ清潔。前に小便、後ろに大便と分けることであまりに追わない。大便には乾燥した馬の糞をかけておく。



エネルギーや資源のある日本で節電や節水を行動に移すことは自分自身できていなかったことに気づく。そんな自分でもエネルギーに限りがある場所では普段から当たり前のように意識して暮らすことができた。工夫一つでここまで節約できるのかと感動した。

また、「廃棄」という視点でエネルギーを考える重要性も感じた。例えば、モンゴルの草原で洗剤を捨てるということと、大便を捨てるということと意味が変わってくる。人の便も動物の糞も土壌の栄養となり、植物を育てる。対して洗剤やシャンプーなど廃棄する時に自然に悪影響である。むしろなぜ今まで考えなかったのかと思った。日本ではゴミは燃やしてもらえ、水も下水道や浄水場が上手に処理してくれる。しかし、日本では過去には足尾銅山鉛毒事件や水俣病など様々な公害問題を経験しておきながら、フクシマで今も処理できない汚染水を貯め続けている。足尾銅山でも鉛毒は今も流れ続けていて、どこにも廃棄できずに貯め続けている。廃棄できないものを生み出すこと自体に問題があると感じる。解決できていないのに忘却してはならない。見ないように見えないようになっていても、今も海外のどこかで、鉛毒問題は必ず発生している。日本はその鉛物を輸入し、便利なスマホや電化製品を生み出していく。

世界的な視野でエネルギーや資源に目を向けていくことが重要であると感じたし、自分たちが使っている電気はどうやって発電しているのか、原発のことも含めて日本でのエネルギーや資源のあり方についてもっと関心をもつ必要があると思った。

人間性

私はモンゴルへ行ってモンゴルのことを大好きになった。それはおそらく、モンゴルで出会った人たちを大好きになったからだと思う。出会った人たちがとてもあたたかくて、優しくかった。そして勉強熱心で真面目。夜遅くまで残って、本を読んだり作業をしたりしている姿を見て、自分はまだまだ努力できる面があると素直に謙虚な気持ちになった。尊敬できる彼らと離れがたく、もっと一緒に活動したかった。「国は人」なのだと感じた。もしも、自分が出会ったモンゴルの人たちが意地悪だったり、冷たい人たちだったりしたら、モンゴルのことをこんなにも好きにはなれていない。それと同じで、きっとモンゴルの人たちも、日本人である私と淳也さんを通じて日本という国を見ていたのだろう。だからこそ人間性、つまり教育の大切さを改めて感じた。

4. アースウォッチでの体験が学校教育にどのような意味を持つか

○校内若手研修での情報共有

校内で夏休みに研修等で自己研鑽した内容をアウトプットする研修があった。その際にプレゼンテーションを用いて報告をしたが、若い時に様々な経験をすることで、ものの見方・考え方が広がるということを伝えたかった。今とは違う環境にいくということは、それだけで自然に「考えを深める」ということにつながる。モンゴルに行ったからこそ日本の良さも課題についても考えることができた。教師自身が積極的に体験することの重要性を伝えられたと思う。

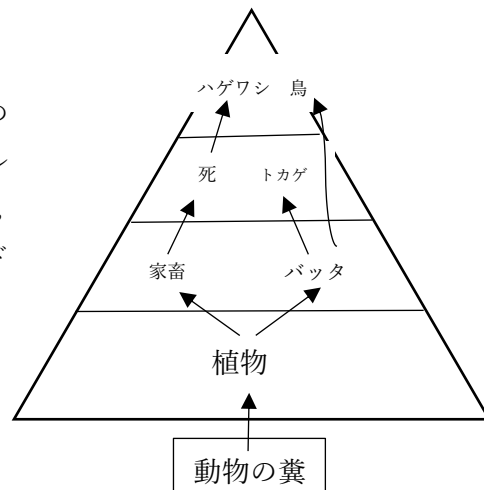
○外国語活動

6年生の単元に「My Summer Vacation」という単元があり、動詞の過去形を使ってスピーチする単元である。夏休みのモンゴルでの思い出をプレゼンテーションを使ってできるだけシンプルな英語と写真で伝えた。民族衣装を着たり、伝統的なゲームを実際にやってみた。また、英語でいう「Hello」や「Thank you」などのモンゴル語を教えると、小学生は順応がはやく、ノリノリで使っていた。



○理科教育

① 6年生の「生物どうしの関わり」の単元で生態系や食物連鎖について学ぶ。その際、教科書に出てくる生き物を中心に生態系ピラミッドを考えた後、モンゴルバージョンでも考える機会をもった。具体的な環境を例に出して考えることで、環境によって暮らしている実際の動物は違うから、その環境ごとにピラミッドがあるのだということを理解していたのではないと思う。



② また、本物に触れることを重視した授業実践を行った。「土地のつくりと変化」という単元ではまず初めに地面の中を想像させた後、地層のはぎ取り標本を触って観察できるようにした。はぎ取り標本は同じ学年の先生たちと校区から少し離れた地層へ行き、協力してはぎ取った。子どもたちは興味をもって地層を観察したり、触ったりしていた。



モンゴルの独特な岩の形から、土地のつくられ方を予想した。同じ質の岩が積み重なっているところから、火山活動によってマグマが積み重なって岩となったことが分かる。子どもたちは「場所によって全然違う」と驚いている様子だった。



○人権学習

世界の「学校にいけない子どもたち」について考える授業を行った。きっかけは Gana があるモンゴル人を紹介してくれた時に、「彼は学校へ行ったことがない」と言った言葉が気になった。モンゴルでは期間限定の移動ゲル教室が来てくれたり、学校の近くの寮に住んだりして教育を受ける子どもたちがいる。ドキュメンタリーのテレビで見つけたモンゴルの少女が「学ぶことが楽しい」「教科書が宝物なの」と言っている姿を見て、学校で学ぶことが幸せであることや学ぶことの意義について考える授業を行った。直接モンゴルでの経験を伝えた授業ではないが、授業を考えるきっかけとなった。

○同和教育

モンゴルでは生き物（家畜）を殺してそのお肉を食べるという話を写真付きで行った。子どもたちの中には写真を見れない子もいたので、その子たちは無理には見せなかった。その後、この人たちのしていることは怖い？ いけないこと？ という質問をすると、「生きるためにしょうがないこと」「誰かがやってくれていること」「僕たちも命をもらって生きている」という答えが返ってきた。けれど歴史の学習で学んでいるように、「動物の死体を処理したり、皮をはいたりする職業の人たちは日本では差別されてきた」と

いう話にもどすことで、「そんな差別はおかしい」と改めて、考えることができた。

4. 終わりに

私はこの体験を通して自分自身が体験することの意義を実感することができた。ネット社会の現代では、見たい写真も調べれば出てくる。知りたいことも知ることができる。しかしそれは、自分ではない誰かの目を通して見た現実でしかないのだ。カメラを通して見たものでしかないのだ。本物に自分が出会ったときに何を感じるのか、それだけはやはり実際に体験してみないと分からない。自分が感じることと他人が感じることは違う。だから、ネットに書いてあることを読んで知った気になってはいけない。カメラと言葉を用いてもモンゴルの自然や人々のすばらしさを伝えきることは不可能であるを考える。自分自身が体験することをこれからも大切にしていければいいなと思う。

だからこそ、今回このような機会を与えてくださった花王株式会社の皆様、アースウォッチジャパンの皆様に心より感謝申し上げます。そして、快く了承してくださった学校長、アドバイスをくださったOB・OGの皆様、モンゴルで出会ったすべての方々に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。